

兵庫方言のアスペクト形式における音形と意味のバリエーション

鴨井 修平

同志社大学大学院・slowmotion[at]outlook.jp

要旨

方言アスペクト研究において、進行相と結果相のアスペクト対立を形態的に区別する西日本諸方言のアスペクト形式 YORU(-*yor-*)と TORU(-*tor-*)の意味機能が注目されてきた。YORU と TORU の意味機能について、近畿以西の方言を中心とした記述と近畿方言を中心とした記述が各々盛んに行われており、両形式がアスペクト以外の意味を標示するという現象が通方言的に観察されている。しかし、近畿以西の方言と近畿方言の接触地域である兵庫方言全体の YORU と TORU については網羅的な記述が行われていない。本研究では、統一の枠組みに基づいて網羅的に記述した方言データより、兵庫方言の YORU には、[-jo:]と[-joru]の2音形、TORU には[-to:]と[-toru]の2音形があり、各2音形の間で[±配慮]や[±卑罵]のポライトネス対立が生じているという事実を報告する。また同様のアスペクト機能を持つ音形の形式的重複はポライトネス対立を発生させるということをも提案する。

1. はじめに

1.1. 研究背景

日本語の方言アスペクト研究において、進行相と結果相のアスペクト対立を形態的に区別する西日本諸方言のアスペクト形式 YORU(-*yor-*)と TORU(-*tor-*)の意味機能が注目されてきた¹。(1)に示すように、高知県土佐方言の YORU [-ju:]は進行相、TORU [-teu:]は結果相を標示する。(cf. 鴨井 2020)

(1) a. PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。

A, 走りゅー/*走っちゅー

b. RES:運動場へ行くと、既に走り終えて休憩している A がいた。

A, 走っちゅー/*走りゅー

(1)より、YORU と TORU はアスペクトにおいて機能的に対立するということが分かる。

YORU と TORU の機能的対立について、近年の研究では、通方言的に TORU への一本化が進んでいると指摘されている²。その変化過程として、(2)に示すような両形式が進行相を標示する現象が多く、西日本諸方言で観察されている。(cf. 工藤 2014)

(2) PROG:畑の中を歩いている最中の子供がいた。

子供が畑の中、歩きよる/歩いとる

(2)より、YORU と TORU は進行相において機能的に重複していることが分かる。

また、近畿方言を中心とした研究では、両形式がアスペクト以外にも卑罵的意味を標示するということが指摘されている (e.g. 井上 1998, 中井 2002, 西尾 2015)。(3), (4)に示すように、近畿方言の一部である大阪府摂津方言の YORU [-joru]と TORU [-toru]は卑罵的意味を標示する。

(3) PROSP:教室に入ると、ちょうど椅子に座る直前の A がいた。

a. (A が座ることに不満がない) A, 座る/?座りよる

b. (A が座ることに不満がある) A, 座りよる/?座る

¹ -*yor-*と-*tor-*には様々な音形があり、例えば、-*yor-u*の音形には[-joru], [-jo:ru], [-jo:], [-ju:]など、-*tor-u*の音形には[-toru], [-teoru], [-to:], [-teu:]などがある。本稿では音形に注目する必要がない場合においては-*yor-u*の音形を全て YORU, -*tor-u*の音形を全て TORU と表記する。

² TORU の進行相への意味拡張に伴って YORU が衰退し、アスペクト形式が TORU1 形式に統合される現象のことを「TORU への一本化」という (工藤 2014)。

- (4) RES:教室に入ると、既に椅子に座っている A がいた。
 a. (A が座っていることに不満がない) A, 座ってる/?座っとる
 b. (A が座っていることに不満がある) A, 座っとる/?座ってる

(3), (4)より, YORU と TORU はアスペクト以外の意味も標示するということが分かる。前述の YORU と TORU の意味機能について, 近畿以西の方言を中心とした記述と近畿方言を中心とした記述が各々盛んに行われてきた。

1.2. 問題提起

井上(1998)や中井(2002)によれば, YORU と TORU の意味機能は兵庫県神戸市を境界に異なるということが指摘されており, 近畿方言では卑罵的意味, 神戸市以西の方言ではアスペクトの標示が基本となっている。しかし, 両者の接触地域である兵庫方言全体の YORU と TORU については網羅的な記述が行われていない。

兵庫県摂津方言の YORU と TORU において, YORU には[-jo:] (Y1)と[-joru] (Y2)の2音形, TORU には[-to:] (T1)と[-toru] (T2)の2音形がある。(5)に示すように, いずれの音形も進行相を標示する。

- (5) PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。
 A, 走りよー/走りよる/走っとー/走っとる

(5)より, いずれの音形も進行相において機能的に重複していることが分かる。また(6)に示すように, Y2 のみが近畿方言と同様の卑罵的意味を標示するという現象が観察される。

- (6) PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。
 a. (A が走っていることに不満がない) A, 走りよー/走っとー/走っとる/?走りよる
 b. (A が走っていることに不満がある) A, 走りよる/?走りよー/?走っとー/?走っとる

さらに(7)に示すように, Y1/T1 と Y2/T2 の間には聞き手の違いによるポライトネス的な使い分けが観察される。

- (7) PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。
 a. (聞き手が友人) A, 走りよー/走っとー/?走りよる/?走っとる
 b. (聞き手が知人) A, 走りよる/走っとる/?走りよー/?走っとー

ここで, (6), (7)のような対立はどのような意味機能や条件によって発生するのだろうかという問題を提起する。本研究では, 統一的枠組みに基づいて網羅的に記述した方言データより, 兵庫方言全体のアスペクト形式における音形と意味のバリエーションを記述し, 同様のアスペクト機能を持つ音形が重複する場合にはポライトネス対立が発生するということを提案する。

2. 研究方法

2.1. 統一的枠組みの設定

本研究では, 兵庫方言全体のアスペクト体系を網羅的に記述するために2種類の命題の時間構造を設定する。まず図1に示すように, 開始兆候点(signal of beginning=sb), 開始点(beginning=b), 終了点(ending), 結果終了点(result ending=re)という4つの参照点と将然相, 進行相, 結果相という3つのアスペクトから構成される命題を命題 α とする。一方, 図2に示すように, 開始兆候点, 開始/終了点(b/e), 結果終了点という3つの参照点と将然相, 結果相という2つのアスペクトから構成される命題を命題 β とする³。

³ 金田一(1950)や Vendler(1967)の動詞分類から見れば, 「走る」「食べる」などの継続動詞(activities)や「作る」「焼く」などの達成動詞(accomplishments)が命題 α の述語となる。一方, 「死ぬ」「消える」などの瞬間動詞(achievements)が命題 β の述語となる。また「ある」「いる」などの状態動詞(states)を述語とする命題は時間構造を持たない命題として扱い, 本稿ではアスペクト形式との共起関係におけるデータ提示を割愛する。

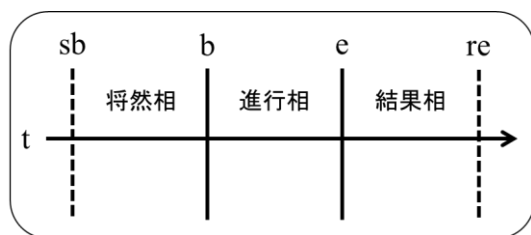


図1 命題αの時間構造

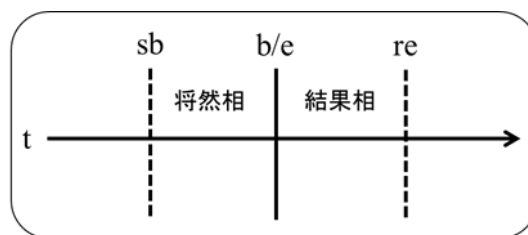


図2 命題βの時間構造

本研究では、これら2つの命題において兵庫方言の YORU と TORU がどのアスペクト上に生起し得るのかを記述する。

また本研究では、丁寧語や敬語のような上位待遇のみならず、卑罵のような下位待遇や配慮のような話し手と聞き手の間の心的距離を総合してポライトネスとし、兵庫方言の YORU と TORU がどのようなポライトネスを標示するのかを記述する。

2.2. 調査概要

本研究では、兵庫方言の YORU と TORU における地理的差異と通時的差異を考慮するため、図3に示すように、方言 X の全体像（母集団）は方言 X を母語とする地区および年齢層の話者（標本）によって特徴づけられると考える⁴。

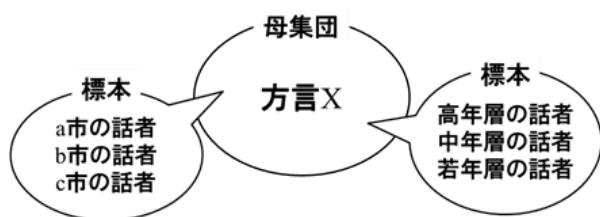


図3 方言 X と出身地・年齢層の関係



酒井(2017)の「兵庫県方言区画図(右図)」に基づいて5つの方言区画(摂津・播磨・丹波・但馬・淡路)における若年齢(18-39歳), 中年層(40-69歳), 高年齢(70歳以上)の話者をインフォーマントとし、各年齢層から3名ずつのインフォーマントに対して同様の質問項目を用いてインタビュー調査を行った。

3. 兵庫方言のアスペクト体系

調査結果より、方言区画による地理的差異は観察されたが、年齢層による通時的差異はあまり観察されなかった。よって本節では若年齢における調査結果を中心にデータを提示する。

まず、5つの方言区画のうち摂津・播磨・丹波方言は同様のアスペクト体系を成していることが分かった⁵。(8)に示すように、YORU と TORU が命題αに生起する場合、YORU は将来相、進行相を標示し、TORU は進行相、結果相を標示する。

⁴ これらは集合と部分集合の関係であり、標本には母集団の性質が反映されている。本研究における方言データの収集方法には、母集団から抽出した標本を分析することで母集団の性質を明らかにするという統計学の視点を加えている。

⁵ 摂津・播磨・丹波方言のうち摂津・播磨方言のみ Y1/Y2 と T1/T2 の音形が観察されたが、アスペクト機能に関しては Y1 と Y2, T1 と T2 は同様であるため、ここでは YORU と TORU に統合して記述する。

(8) 「A が走る」のアスペクト

- a. PROSP:運動場へ行くと、スタートラインの手前で、走る直前の A がいた。
A, 走りよる/*走っとる
- b. PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。
A, 走りよる/走っとる
- c. RES:運動場へ行くと、既に走り終えて休憩している A がいた。
A, 走っとる/*走りよる

(8)より、将然相と結果相においては YORU と TORU は機能的に対立しているが、進行相においては機能的に重複していることが分かる。命題 α の各文脈における調査結果を集計表に示す⁶。

表 1 命題 α における調査結果 (若年層)

命題 α-将然相	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、スタートラインの手前で手首足首を回す、走る直前の A がいた	3	3	0	0
【焼く】台所に行くと、フライパンに油をひいて魚に手を付ける、焼く直前の A がいた		3	0	0
【降る】カーテンを開けると、空が暗く曇っていて雨が降る直前の天気だった		0	0	3

命題 α-進行相	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中の A がいた	3	3	3	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中の A がいた		3	3	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		3	3	0

命題 α-結果相	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、練習メニューである 10 周を走り終えて休憩している A がいた	3	0	3	0
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移している A がいた		0	3	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		0	3	0

次に(9)に示すように、YORU と TORU が命題 β に生起する場合、YORU は将然相を標示し、TORU は結果相を標示する。

(9) 「A が座る」のアスペクト

- a. PROSP:教室に入ると、ちょうど椅子に座る直前の A がいた。
A, 座りよる/*座っとる
- b. RES:教室に入ると、既に椅子に座っている A がいた。
A, 座っとる/*座りよる

(9)より、命題 β においては YORU と TORU は機能的に対立していることが分かる。命題 β の各文脈における調査結果を集計表に示す。

⁶ Y=YORU, T=TORU, 他=その他を表す。各表は 3 名のインフォーマントが文法的に使用する形式を複数選択した結果を集計したものである。ここでは主語の属性を問わないため、主語を A として提示する。

表2 命題βにおける調査結果（若年層）

命題β-将然相	話者	Y	T	他
【座る】部屋に入ると、荷物を置いて椅子を引いた、座る直前のAがいた	3	3	0	0
【死ぬ】道路を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた		3	0	0
【消す】部屋に入ると、スイッチに手を伸ばしてストーブの火を消す直前のAがいた		3	0	0

命題β-結果相	話者	Y	T	他
【座る】部屋に入ると、椅子に座っているAがいた	3	0	3	0
【死ぬ】道路を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた		0	3	0
【消す】部屋に入ると、ストーブの火を消し終えて部屋を換気しているAがいた		0	3	0

同様の方法に基づいた調査を5つの方言区画において行い記述した結果より、兵庫方言のアスペクト体系は2種類に分けられる。5方言全てのデータの提示は割愛し、各アスペクト体系を図4、図5に総括して示す。

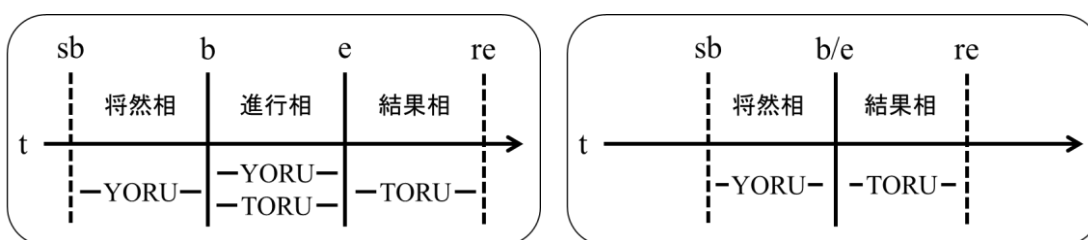


図4 摂津・播磨・丹波・但馬方言のアスペクト体系

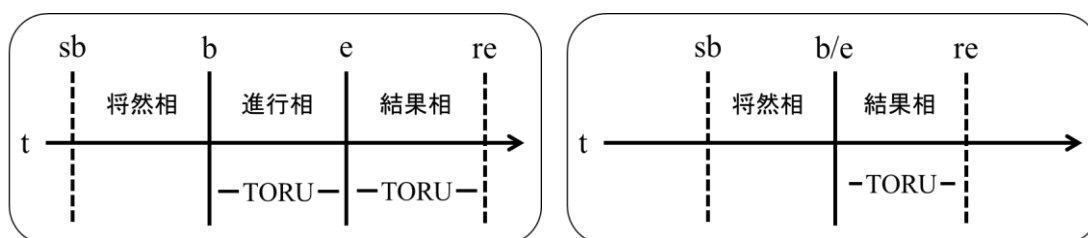


図5 淡路方言のアスペクト体系

4. YORU と TORU における音形と意味のバリエーション

4.1. YORU と TORU のアスペクト対立

前述のアスペクト体系より、摂津・播磨・丹波・但馬方言では進行相における YORU と TORU の機能的重複が観察される。しかし、摂津・播磨・丹波方言においては、(10)に示すように、YORU は[+起動]、TORU は[-起動]の意味素性を持つという点でアスペクト対立が観察された。

(10) PROG:運動場へ行くと、走っている最中のAがいた。

- a. (Aは走り始め直後) A, 走りよる/走っとる
- b. (Aは走り始め直後以降) A, 走っとる/?走りよる

但馬方言からは(10)のような対立は観察されなかったが、兵庫方言の YORU と TORU の対立はポライトネスにおける対立ではなく、[±起動]のアスペクトにおける対立であることが分かる。

4.2. Y1 と Y2 のポライトネス対立

YORU の音形を 2 種類持つ方言は、摂津・播磨方言であり、Y1 と Y2 は共に将然相、進行相を標示するため同様のアスペクト機能を持つ。しかし(11)に示すように、Y1 は[-配慮] [-卑罵]、Y2 は[+配慮] [+卑罵]の意味素性を持つという点でポライトネス対立が観察される。また Y2 においては 2 つの意味がアクセントで区別されており、「よ1る」は[+配慮]、「1よる」は[+卑罵]を標示する。

(11) PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。

- a. (聞き手が友人) A, 走りよー/?走りよ1る/?走り1よる
- b. (聞き手が知人) A, 走りよ1る/?走りよー/?走り1よる
- c. (A が走っていることに不満がない) A が, 走りよー/?走り1よる/?走りよ1る
- d. (A が走っていることに不満がある) A が, 走り1よる/?走りよー/?走りよ1る

[±配慮]における対立は、聞き手が話し手にとって配慮しないような相手であれば Y1, 配慮するような相手であれば Y2 が選択されるというポライトネス対立である。また[±卑罵]における対立は、命題内容に対する話し手の不満がない場合であれば Y1, 不満がある場合であれば Y2 が選択されるというポライトネス対立である⁷。データの提示は割愛するが、将然相でも同様のポライトネス対立が生じる。

4.3. T1 と T2 のポライトネス対立

TORU の音形を 2 種類持つ方言は、摂津・播磨・淡路方言であり、T1 と T2 は共に進行相、結果相を標示するため同様のアスペクト機能を持つ。しかし(12)に示すように、T1 は[-配慮]、T2 は[+配慮]の意味素性を持つという点でポライトネス対立が観察される。

(12) PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。

- a. (聞き手が友人) A, 走っとー/?走っとる
- b. (聞き手が知人) A, 走っとる/?走っとー

(12)の対立は、(11)の[±配慮]における対立と同様、聞き手が話し手にとって配慮しないような相手であれば T1, 配慮するような相手であれば T2 が選択されるというポライトネス対立である。データの提示は割愛するが、結果相でも同様のポライトネス対立が生じる。また T2 においては Y2 で観察された 2 種類のアクセントで 2 つの意味を区別するというような現象は観察されなかった。

4.4. ポライトネス対立の発生条件

前述のようなポライトネス対立は、同様のアスペクト機能を持つ音形が存在しない丹波・但馬方言においては生じていない。(15)に示すように、丹波・但馬方言の YORU と TORU において、配慮や卑罵のようなポライトネスは形式の選択に影響しない。

(15) PROG:運動場へ行くと、走っている最中の A がいた。

- a. (聞き手が友人) A, 走りよる/走っとる
- b. (聞き手が知人) A, 走りよる/走っとる
- c. (A が走っていることに不満がない) A が, 走りよる/走っとる
- d. (A が走っていることに不満がある) A が, 走りよる/走っとる

このように、兵庫方言のアスペクト形式におけるポライトネス対立は、Y1 と Y2, T1 と T2 のように同じアスペクト機能を持つ音形が 2 種類存在する方言でのみ発生している。以上の事実は全て、同様のアスペクト機能を持つ音形が重複する場合にはポライトネス対立

⁷ ここでのポライトネス対立は、文法・非文法という対立とは異なる。アスペクト上に生起するという意味においてはいずれの形式も文法的であるが、インフォーマントが配慮や卑罵という指標に基づいて、使用するのが相応しいと判断した形式は自然、相応しくないと判断した形式は不自然(?)という対立である。

が発生するという本研究の提案を支持している。

5. 総括

前述の方言データより、兵庫方言の YORU と TORU における意味機能は次のように整理できる。

表3 兵庫方言の YORU と TORU における意味機能

ASP	YORU		TORU	
	将然	進行 +起動	進行 -起動	結果
POL	Y1 [-jo:]	Y2 [-joru]	T1 [-to:]	T2 [-toru]
	-配慮	+配慮 (よ1る)	-配慮	+配慮
	-卑罵	+卑罵 (1よる)		

まずアスペクトに関して、進行相を標示するという点において YORU と TORU は機能的に重複するが、進行相では[±起動]によるアスペクト対立を成している。なお淡路方言においては YORU の使用が観察されず、丹波方言の YORU と TORU においては進行相上の[±起動]による対立が観察されなかった。これについての記述と分析は課題とする。

次にポライトネスに関して、YORU に Y1 [-jo:] と Y2 [-joru] の2種類の音形がある場合、Y1 は[-配慮] [-卑罵]という点でニュートラル形式、Y2 は[+配慮] [+卑罵]という点でポライトネス形式であり、配慮か卑罵かについては異なるアクセントによって区別される。また TORU に T1 [-to:] と T2 [-toru] の2種類の音形がある場合、T1 は[-配慮]という点でニュートラル形式、T2 は[+配慮]という点でポライトネス形式である。

最後に、辰浜(1977)の記述によれば、当時の播磨方言の音形は Y1/T1 のみであったため、本研究の記述と比較した際 Y2/T2 は新形式であると考えられる。兵庫方言においては旧形式である Y1/T1 をアスペクト形式として使用している一方、新形式である Y2/T2 をポライトネス形式として使用していること考えられるが、同じアスペクト機能を持つ複数の音形が重複する場合、なぜポライトネスにおいて対立するのだろうかという問題が残る。このアスペクトとポライトネスの関係については、今後、同様の統一的枠組みに基づいて西日本諸方言を網羅的に記述し、方言間の比較対照より分析を行う必要がある。

略号

ASP:アスペクト、POL:ポライトネス、PROG:進行相、PROSP:将然相、RES:結果相

参考文献

- 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態－存在型表現形式に焦点をあてて－』 東京：秋山書店。
- 鴨井修平 (2020) 「西日本諸方言におけるアスペクト体系のバリエーション－YORU・TORU・TERU の記述を中心に－」 『言語記述論集』 12, pp. 223-240.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15: 48-63. (金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 5-26. 東京：むぎ書房に再録) .
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 東京：ひつじ書房。
- 中井精一 (2002) 「西日本言語域における畿内型待遇表現の特質」 『社会言語科学』 5 (1), pp.42-55.
- 西尾純二 (2015) 『マイナスの待遇表現行動－対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮－』 東京：くろしお出版。
- 酒井雅史 (2017) 「兵庫県神戸市方言」 『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』 pp. 97-104.
- 辰浜マリ子 (1977) 「相生方言のアスペクト－「居る」・「て居る」について－」 『都大論究』 14, pp.127-141.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.